

氏 名 宇田 敦子  
ヨ ミ ガ ナ ウダ アツコ  
学位の種類 博士(映像)  
学位記番号 博映第21号  
学位授与年月日 令和5年3月27日  
学位論文等題目 (論文) 紙芝居表現論 ―相互作用を生成する紙メディア表現の実践―

論文等審査委員

主査 東京藝術大学 教授 (映像研究科) 布山 タルト  
副査 東京藝術大学 教授 (映像研究科) 山村 浩二  
副査 東京藝術大学 教授 (映像研究科) 桂 英史  
副査 多摩美術大学 教授 (美術学部情報デザイン学科) 永原 康史

(論文内容の要旨)

本論文は、日本で独自の発展を遂げてきた「紙芝居」という伝統的なメディア表現にあらためて光をあて、表現メディアとしての紙芝居の現代的な意味を、歴史研究と実践研究の両輪で再検討することを目的とする。

本研究の背景は、映像作家として活動してきた筆者自身の経験にある。筆者は1990年代後半から四半世紀に渡り多様な映像メディアを用いた作品制作を行ってきた。そこでの主題は、表現における「自己」と「メディア」と「他者」の間の相互作用の問題だった(本論文ではその主客を分けるのが難しい相互作用を「自己/メディア/他者」という書式によって記述する)。筆者が実践してきたのは「自己/他者」の関係性の間に多様な「メディア」を介在させる試みで、「メディア」を乗り換えながら自己理解の探求を模索する過程だった。

だがその蓄積で「自己/メディア/他者」の関係に厚みもたらされたかという必ずしもそうではなく、「自己/メディア」の関係に囚われて翻弄された面もあった。そのような制作態度を見直す転機となったのが2011年の東日本大震災である。あの時、自身が積み重ねてきた自己表現の場が強制的にリセットされたような危機意識があった。そうしてこの先、何が起ころうとも自己表現の場として安心して「自己/他者」の関係を模索出来るような、強度と永続性のある自立したメディアはないものかと模索しはじめ、その過程で偶然出会ったのが紙芝居だった。紙芝居は、昭和文化の生き残りのように細々と残存する、もはや新規性のないメディアと見なされているかもしれない。しかし筆者はそこにまだ開拓されていない未知の表現の可能性があるかと直観した。紙芝居表現を問い直すことが、映像メディア表現の新たな可能性を拓くのではないか。このような考えで、本研究は「表現メディアとしての紙芝居の持つ現代的な意味は何か」という問いについて、歴史研究と実践研究で取り組むものである。

本論文は以下の構成で論じられる。まず第1章の序論では、筆者自身のこれまでの実践をふりかえり、紙芝居を「相互作用を生成する紙メディア表現」として捉えなおす本論文の視点を示すとともに、本研究の問い―「表現メディアとしての紙芝居の持つ現代的な意味は何か」―を示した。

第2章は歴史研究で、紙芝居というメディアの歴史をあらためて俯瞰するとともに、その歴史の中で埋もれてしまった表現の可能性について考察した。歴史研究としての本論文の独自性の一つは、先行研究における「街頭紙芝居」と「教育紙芝居」という二つの分類に、あらたに「自主紙芝居」という第三カテゴリーを設け、紙芝居表現の周縁の広がりを示したことだ。更に紙芝居の歴史を「紙メディアのデザイン」と「芝居パフォーマンス」という二つの観点から立体的に捉えなおして、「操作性」「運動性」「時間性」「参加性」「可搬性」「複製可能性」「再演可能性」「自作可能性」という八つの特性を示した。

第3章は実践研究で、第2章で検討した紙芝居メディアの可能性に基づく自身の実践として三つの実践を論じて、その意味を考察した。その独自性の一つは、それまで「場」という単位で分節化されていた紙芝居に、あらたに「景」という単位を設けて、観客の主体性を引き出すために必要な「間」を生じさせるしかけとしたことだ。更に伝統的に紙芝居表現においてタブーとされてきた微妙な心理描写を試みた点も、本実践における独自の試みだといえる。

第4章は本論文の結論として、紙芝居表現がいかなる意味を現代にもたらすのかについて、次のように結論づけた。紙芝居はその歴史において「参加性」と「可搬性」にその強みを持つが、ことに「参加性」は社会の様々な局面で分断が生じている現代において、重要な意味を持つ。かつて紙芝居は日銭を稼ぐために市井の人々が生み出し、育てた日本の文化であった。いわば紙芝居が失業者達にとって切実な、社会と関わる手段となっていたのだ。それは現代においても同様であり、紙芝居は疎外感を抱く人々に、他者との接触と交流の機会を与えてくれる。紙芝居が演じられる時、自己には「演者」、他者には「観客」という役割が与えられる。たとえその場限りの「演者/観客」という関係性であっても、紙芝居を通じて「自己/他者」の関係は、自ずと築き上げられる。紙芝居のそういった「参加性」は、必ずしも「演者/観客」の関係性を固定した上で生じるものではなく、その関係を入れ替えることすら積極的に行われるような流動的な「参加」である。そのような流動性を含んだ関係性の生起を、本論文では「相互作用の生成」と呼んで、それを生み出すための実践の可能性を示した。また「可搬性」の観点からは、映像メディアの可搬性が極端に進み、「もの」として消費されている現代において、紙芝居の限定的な「可搬性」が抵抗手段となりうるのではないか。表現メディアとしての紙芝居は、様々な場に赴くことのできる「可搬性」を持つが、とはいえそれを「もの」として所有することが出来ないという限定性をもつ。あくまでも「もの」として消費されることを拒み、一回性の「こと」として、あるいは「場」として、「自己/メディア/他者」の相互作用の生成に参加することを、紙芝居という表現メディアは私たちに求めるのである。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、日本において独自の進化を遂げてきた「紙芝居」に焦点をあて、その歴史的変遷を俯瞰してその表現特性を明らかにすると共に、筆者自身が「自主紙芝居」の実践者として三つの紙芝居の制作・実演を行い、紙芝居の現代的な意味と可能性を論じたものである。筆者は1990年代後半からデジタル、アナログを問わず多様なメディアを用いながら「相互作用

(インタラクション)の問題に取り組んでおり、その長年の制作における問題系を引き継ぐ形で、紙芝居を「相互作用を生成する紙メディア表現」として再定義し、時間表現の間(ま)を操作する「景」の概念を設けて、その表現のためにドットアニメーションの技法を応用した独自の紙芝居表現の仕組みを開発し、宮沢賢治の原作に基づく紙芝居を制作・実演した。

審査においては、まず実践として制作・実演された紙芝居表現について、パフォーマンスの質に関する指摘があった。筆者は紙芝居を論じるにあたり「紙メディアのデザイン」と「芝居のパフォーマンス」という2つの観点を提示しているが、後者の観点からは未だ未熟な面が残るという指摘であり、筆者自身も結論で今後の課題として認めている。一方、前者の「紙メディアのデザイン」という観点については、筆者が長年取り組んできた様々なメディアを用いた表現実践を補助線として、新たに取り組んだ紙芝居作品の制作・実践を段階的に深めていった過程には一定の説得力があり、またその過程が既存の紙芝居メディアの在り方に対する批判性を含んでいる点は評価できる。ただし独自に提唱する「景」の概念に基づいて表現するために開発された紙メディアの装置的な独自性を活かすならば、原作を用いるよりもオリジナル脚本による作品として発展させるべきだったという指摘があり、また宮沢賢治を原作とする以上、その解釈の掘り下げの深さが問われることになるが、本論文が参照する先行研究はやや限定的で、偏りがあることも問題として指摘された。その他にも、紙芝居の歴史研究としてはその起源から全体を俯瞰した上でその中で埋もれた表現の可能性を掘り起こした意義は評価できるが、昨今、各地の図書館で展開されている教育紙芝居の新たな取り組みについてはほとんど触れられていないなど、現状分析としては不十分な面もある。

以上のようにいくつかの問題があるものの、筆者が四半世紀に渡り多様なメディアを用いて制作してきたインタラクティブなメディア表現の豊富な実践経験を土台として、マイナーなメディアとしてこれまでほとんどアートの文脈で語られることのなかった紙芝居というメディアの持つ可能性について、歴史研究のみならず実践研究として論じるという試みには明らかかな独自性があり、映像メディア学の射程を拡げうる新規性のある研究として、本論文の成果は高く評価されうる。また今後の更なる実践の展開にむけてそれを基礎づける研究としても十分に意義があることから、本論文が博士論文としてふさわしい水準に達していると評価され、全員一致で合格と判定された。